

20～40 歳代女性の貧血の割合の長期的経年推移

研究分担者 横山 徹爾 (国立保健医療科学院 生涯健康研究部)

研究要旨

「Global nutrition targets 2025」の目標 2「生殖可能年齢にある女性の貧血を 50%減らす」に関して、近年のわが国の状況を明らかにするために、1989～2017年国民(健康・)栄養調査データを用いて経年推移を記述した。分析対象は20～49歳女性で、妊婦・授乳婦は除外した。Hbの平均値は1989～2003年にかけて低下しており、特に40歳代で顕著であったが、その後は上昇に転じていた。貧血の割合もそれに合わせて増加した後、減少(30歳代は横ばい)に転じていた。やせの割合と食事エネルギー摂取量の経年推移もこれらの変化と類似していた。今後も同様の傾向が続くのか、モニタリングを継続していく必要がある。

A. 研究目的

母子の栄養改善について対応するべく、WHOは2012年の総会において、2025年までに達成すべき栄養改善に関する具体的な目標として「Global nutrition targets 2025」を策定した。これは以下の5つの目標からなる。

- ・目標 1 (Stunting) : 5歳以下の子どもの発育阻害の割合を40%減らす。
- ・目標 2 (Anemia) : 生殖可能年齢にある女性の貧血を50%減らす。
- ・目標 3 (Low Birth Weight) : 出生児の低体重を30%減らす。
- ・目標 4 (Childhood overweight) : 子どもの過体重を増やさない。
- ・目標 5 (Brest feeding) : 最初の6か月間の完全母乳育児の割合を50%以上にする。
- ・目標 6 (Wasting) : 小児期の消耗症の割合を5%以下に減少・維持する。

2021年12月には「東京栄養サミット

2021」が開催され、本研究班ではわが国における乳幼児の身体発育や健康度について、国際的に示していくためのナショナルデータ作成も行っている。本分担研究では、わが国の代表的な公的調査である国民健康・栄養調査結果に基づいて、目標2の「生殖可能年齢にある女性の貧血」の割合について、経年的な推移を示すことを目的とする。

B. 方法

1989～2017年国民(健康・)栄養調査データ(1988年以前は血中ヘモグロビン(Hb)のデータなし)を統計法に基づき利用申請して用いた。分析対象は20～49歳女性で、妊婦・授乳婦は除外した。

年齢を10歳幅で3群に分け(20～29歳、30～39歳、40～49歳)、各群のHbの平均値と貧血(Hb<12 g/dL)について、1989～2017年の経年推移を記述した。また、Body Mass Index (BMI)の平均値と、やせ

(BMI<18.5 kg/m²)の割合も併記した。エネルギー摂取量とたんぱく質摂取量の平均値も同様に示した。

C. 結果

表1に、1989～2017年のHbの平均値、貧血の割合、BMIの平均値、やせの割合の数値表を示す。なお、2012年と2016年は拡大調査のためHbは測定されていない。

図1に、経年推移を移動平均(3年幅)で示す。Hbの平均値は1989～2003年にかけて低下しており、特に40歳代で顕著である。しかしその後は上昇に転じている。貧血の割合もそれに合わせて増加した後、減少(30歳代は横ばい)に転じている。

やせの割合はいずれの年齢階級でも増加し、特に20歳代と30歳代で2003年頃まで顕著であったが、その後は横ばい～軽度低下傾向である。40歳代では2008年頃まで増加した後、横ばいとなった。

総エネルギー摂取量とたんぱく質摂取量は、やせの割合と似た推移を示した。

D. 考察

1980年から2015年までの低出生体重児の割合(Global nutrition targets 2025・目標3)の経年推移を分析した吉田の分担研究では¹⁾、2005年までその割合が上昇した後、2015年にかけてほぼ横ばいとなっており、これには妊娠週数等の寄与が大きいことが示された。人口動態統計で把握されない要因として、女性のやせ願望、妊娠中の体重増加量、不妊治療、喫煙などの要素が挙げられる。本分担研究では20～49歳女性の貧血の割合(同・目標2)の長期推移を調べたところ、2003年まで貧血が増加した後、改善～横ばいに転じており、また、20歳代と30歳代のやせの割合も同様であり、低出生

体重児の割合の経年推移と類似した動きをしていることが示された。Hayashiらの先行研究では²⁾、同様に国民(健康・)栄養調査データを用いた分析を行い、1989年から2003年まで調べて増加傾向にあることを報告していたが、本研究ではその後、改善～横ばいに転じたことが示された。2003年以降に貧血の割合が改善～横ばいとなった理由は明らかでないが、同期間に減少していた食事からのエネルギーやたんぱく質摂取量がその後横ばいに転じていることから、食事要因が大きく寄与している可能性がある。食事からの鉄摂取量については、途中の年度で食品成分表の改定があったため、経年変化を比較することはできなかった。

今後もこれらの傾向が続いて貧血の割合が減少を続けるのか、モニタリングを継続していく必要がある。

E. 結論

Hbの平均値、貧血の割合の1989～2017年の経年推移について、国民(健康・)栄養調査データを用いて調べた。Hbの平均値は1989～2003年にかけて低下しており、特に40歳代で顕著であったが、その後は上昇に転じていた。貧血の割合もそれに合わせて増加した後、減少(30歳代は横ばい)に転じていた。今後もこれらの傾向が続くのか、モニタリングを継続していく必要がある。

F. 健康危機情報

なし。

G. 研究発表

なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし。

<参考文献>

- 1) 吉田穂波. 人口動態統計特別集計データを用いた低出生体重児増加の要因に関する二次解析. 令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業))分担研究報告書. 令和4年5月.

- 2) Hayashi F, et al. Trends in the prevalence of anaemia in Japanese adult women, 1989–2003. *Public Health Nutrition* 2007; 11(3): 252-257.

図1. 20～49歳女性の血中ヘモグロビン濃度、貧血の割合（上段）、BMI、やせの割合（中段）、総エネルギー摂取量、たんぱく質摂取量（下段）の経年変化（1989～2017年）

